

WEB 版「建築討論」 レポーター報告書

レポーター

氏 名	井上悠紀
所 属	株式会社 IAO 竹田設計

建築諸元 わかる範囲でご記入ください

名 称	田の浦番屋、田の浦地区集会所（木興プロジェクト 2011-2013）		
設 計 者	木興プロジェクト、滋賀県立大学		
所 在 地	宮城県南三陸町歌津字田の浦		
用 途		竣工年月	年 月
階 数	階	地 下 階	屋 上 階
構 造 種 別			
建 築 主		施 工 会 社	
構 造 設 計 者		設 備 設 計 者	

建築概要、特徴、評価する点など（800～1,600 字程度）

フィールドワークレポート-津波被災地で学ぶこと-

■必要とされるものをつくりたい

東日本大震災の後、滋賀県立大学の加子母木匠塾（岐阜県中津川市加子母で 2005 年以降続けられてきた木と木造建築について学ぶことを目的とする）は、「木興プロジェクト」に名を変えて、活動拠点を岐阜県加子母村から津波被災地へと移すこととなった。被災地に、急務の仕事があるだろうと予測したからで、誰かの何かの役に立つ建築を建てたい気持ちが強くあった。私は大学 4 年生からそのメンバーの 1 人だった。

2011 年から現在まで、フィールドとなっているのは海沿いの小さな集落、宮城県本吉郡南三陸町歌津字田の浦（以下、田の浦）である。学生たちは、代替わりしながら、今も継続してこの田の浦へ通っている。

2011 年 6 月、被災地で支援活動したいと立ちあがった「木興プロジェクト」は、海沿いの集落を転々と車で移動する中で、田の浦と出会った。お施主さんとなったのは、田の浦の漁師さんだった。「集まって話をする場所が欲しい」「番屋（漁業の作業小屋）が欲しい」という。激しい地盤沈下による被害の大きかった海岸線では建物の建てられない場合が多かったが、田の浦漁港の番屋は、元々高い基壇（約 1.5m）の上に建っていた。津波で建物（番屋）は流されたが、その基壇だけが浜に残っており、基壇の上になら、建物の建設が可能だということで、話がうまく進んだ。

2011 年 8 月、田の浦の漁港にわずか 5 坪弱の小さな番屋を建設した。当時、被災地は瓦礫撤去の真只中で、海岸線では、ほとんど道路すらなく、道無き、じゃり道をなんとか覚えて車の運転をし、資材や道具を調達した。

この田の浦番屋の建設はわずか 2 週間という短い工期だったにも関わらず、多くの協力者達が自由に入りする現場だったのが印象に残っている。施主の漁師さんたちは、学生よりもはるかに手際が良く、見られんと言わんばかりに作業を手伝ってくださった、毎日きまってアイスや飲み物の差し入れを持ってきてくれ、みんなで一緒に頂いた。地元の大工さんは、道具の使い方から施工の方法などしょっちゅう指導しに来てくださるし、材木店などの資材屋さんにも大変お世話になった。おかげで工期もほぼ予定通り。竣工時には、感極まって皆で万歳をし、共に番屋の完成を祝った。実に一体感のある素敵なプロジェクトだった。求められている建築をこの手でつくることに感動を覚えた。〈写真 1〉

■番屋の移築可能システムの構想

震災から 1 年経った 2012 年 5 月、地盤沈下した田の浦漁港の嵩上げ工事が始まるのに際して、私達がつくった番屋を早くも解体しなければいけなくなった。漁師さんたちから「この番屋がなければ困る」「番屋があつて本当に助かってんだ、これが無かったら、冬場は寒くて仕事ができなかったんだから」という声を聞いた。私達は、番屋の移築工事を行うことにした。

建設時から、漁港の復旧工事によってゆくゆくは移築しなければならないであろうことを聞いていたため、番屋は移築を想定して設計していた。その内容は、軸組をユニット化し、パーツの組み立てを行うこと、また、それらの部材の運搬時、業者さんなどに頼まなくてもいいように、各ユニットは、2 トン・トラックに積める大きさに合わせて寸法が決めているというものだった。フレームは、柱と梁が一体化し

た2つのユニットを組み合わせ、梁を中心部で接合するという形だ。〈写真2〉

解体工事が始まると、学生の設計の未熟さが露になった。ユニット化されたパーツの接合部の部材には多少のガタがきており、ボルトが緩み、片流れの屋根が、中心で少し沈むという事態だった。

それからさらに浜の復旧工事が進み、今、番屋は、2度目の解体・移築を余儀なくされつつある。そろそろ撤去してもいいのではないかという話もある中、愛着もあるということで、再度、別の敷地に移設する計画が進行中である。番屋が次の移築に耐え得るかどうか心配なところである。

■2年目の転換点

木興プロジェクトのキーマンは、漁師さんたちである。漁師さんたちは私達が田の浦へ行くと、いつも採れたての海の幸を振る舞ってくださる。ウニ、ホタテ、ホヤなどを生のまま、あるいは焼いたり、料理したりしてご馳走してくだり、この上なく贅沢なお酒を一緒に頂いている。

2012年の番屋移築完了時にも、漁師さんたちは飲み会を開いてくれた。当時、木興プロジェクトは、勢いで駆け抜けた1年目の番屋建設の活動に区切りが付き、以後の活動をどうするか議論の最中だった。まだまだ、必要なものがあるのではないかと、そんな気持ちがあった。すると、「田の浦のみんなが集まって話が出来るような場所が無い、できるなら番屋よりも大きいと良い、100人くらい入れるものがある。」という。「期待に答えなくては」という使命感と、大規模な建築の要望に「私達出来るだろうか。」という不安を感じた。ただ、それ以上に、1年目と同じく必要とされるものを作りたい気持ちが強くあり、真剣な気持ちで向き合う覚悟を持った。

震災から2年が経って、生活を営むのがそれぞれ忙しく、街のことや集落のこと、みんなで使う集会所のことを考えるまで、手が回らないといった雰囲気があった。そもそも、よく話しをする田の浦の漁師さんの中でも、集落の重鎮や、田の浦契約会の役員を務める数名の声は大きい。その人達が集会所の建設を求めているも、他の漁師さんや集落全体の住人にとってどうなのかは、分からない。また、「みんなの為に集落全体の集会所ならもっと多様な意見があるはずなのに、この場に居る人だけで、話を進めてしまっているのかな」とも感じていた。

集会所の建設計画について、お年寄りやお母さんや子どもなど、利用者となる人達の意見や要望を広く集める為に、住人全体へ向けたアンケートを作成し、ヒアリングを行った。回覧板を回すと形式的になってしまい、本音が聞き出せたともしなかつた。「ボランティアの学生さん」「ありがとう」多くの人が使う言葉に、私は「滋賀からきた学生」という距離感を感じていた。「どうしたら、街の人と仲良くなれるだろう。」と悩んでいたのは、集会所について、集落の人達の真意があれば知りたかつたし、賛成反対意見などがあるならもっと話し合いをしたかつたからだった。しかし、実際は、反対意見があるのかもよく分からなかつた。だからといって無理です、という結論に至る理由も見当たらなかつた。

■ミューチャル・エイドによる集会所増改築システムの構想

集会所の建設計画が集落全員の合意を得られたわけではなかつたが、「学生さんが建ててくれるならどんなものでもありがたい、小さくてもいいからできる範囲でやってくれればいい」という一部の人達の言葉を受けて、建物を建てたい純粋な気持ちから、集会所の建設を目指すことにした。建てること決まった以上、「1人でも多くの人に使ってもらえる場所をつくる」という気持ちだった。

田の浦契約会の会長から「ここへ建ててほしい」と言われた敷地は、田の浦地区旧集会所『田の浦漁村センター』の跡地だった。震災時、地区の避難所だった場所で、ここへ避難していた人の内、3名が津波で流され、亡くなった。この土地は田の浦契約会が所有しており、会長さんから「みんなの土地だから、自由に使い方を考えてくれたらいい。」と話をいただいた。約390坪ほどの広い敷地で、浜からは少し離れているが海が見える場所だ。

設計をまとめる為に、私達がコントロールすべき事項は、短い工期、低い技術、限られた予算、そして、施主の要望である、大きめの箱、つまり田の浦の住人100人が入れる屋内空間だった。

私達は、2~3年の期間を見据えて、徐々にセルフビルドで屋内空間を拡大していけるというシステムを構想した。最小限の屋内空間として2間×2間の8畳間を1部屋、2間×4間の木軸スケルトンを半屋外空間とし、合わせて2間×6間の平面構成とした。半屋外空間を、今後の必要に合わせて少しずつ増築し、ゆくゆくは100人が入れるように、集落の住人と学生とで増改築して行こう。ということで、今後の被災地の復興状況が分からない中で出来ることから少しずつ形にしていく為の設計を行った。建設費用は大学の先生方にサポート頂き、主な出所は、赤い羽根共同募金と滋賀県立大学の近江楽座であり、大体の総工費は資材費等約90万円+学生の移動費30万円、建坪は12坪、坪単価は10万円である。

2012年9月に田の浦地区集会所は、無事竣工した。〈写真3〉

その後、2013年夏に、後輩達は、大規模な増築工事を行い、12坪全てを屋内空間とした。〈写真4〉2014年夏には、そのまた後輩の手によってトイレ周りの下屋の増築工事等が行われた。少しずつ、田の浦地区

集会所プロジェクトは、継続している。しかし、当初思い描いた、住人と学生によるミューチュアル・エイドによる建設という構想は現実化されていない。あくまで学生主体によるものである。

田の浦の地区集会所の場合、施主は住人で、匿名的な「みんな」だった。「みんなそう（集会所が欲しいと）思ってるんだよ」というのは、結局特定の誰でもなかった。その状況をコントロール出来なかったという点で、設計者である学生と施主である集落の住人との間になかなか埋まらない距離感があった。田の浦での経験を経て、集会所は本当に必要なのか、あの建築を建てる意味をずっと考え続けているのは、学生の建てたい気持ちと施主の建ててもらいたい気持ちにギャップを感じたからである。

■巨大ベルトコンベアーと新しい街の建設

先日、私は1年ぶりに東北へ行った。田の浦へ行きたくなったのと、津波被災地の近況を見に行こうと思って、仙台でレンタカーを借り、南三陸町、気仙沼、陸前高田、大船渡まで車で走った。

陸前高田市の、総工費約10億円かけてつくられたという巨大なベルトコンベアーが印象的である。120mの山を80m切り崩して市街地に運ぶのだ。いち早く仮設を退去してもらうことが最優先だとすると、ダンクで10年かかるこの大きな町の嵩上げを2年に縮めるベルトコンベアーは、合理的という話のようである。今後、今までの土地所有は白紙となり、嵩上げや高台移転用に整備された新しい土地を、抽選によって宅地を分配するらしい。しかし、被災前の高田地区の地形を大きく変える方針には賛否両論あるようだった。

たまたま話をしたおばちゃんは、高田地区で家と家業を失ったらしく「道具もないし、歳とってるから、先を考えるとお金もかけられないし、仕事は諦めてる」という。土地の所有権をめぐって、被災状況の違う全員が合意することは、果てしなく困難な状況があるだろう。「抽選が1番公平だからね。」とおばちゃんは言っていたが、元々あった家の場所は、新しい都市計画において、道路になっているらしい。あの壮大なスケールで土を運ぶベルトコンベアーを眺めると、スピードそして事業採算性、様々なリスクヘッジが優先されただろうことを想像する。何もないあの土地の計画は、地域、住人からの意見をどのように聞き、答えはどの段階で決定したのだろうか。

私達の田の浦の集会所プロジェクトとは、あまりにもプロジェクトの規模が違い過ぎるけど、ひよっとすると悩みや問題の原点は同じ所にあるのではないかと思った。また、被災地だけではなく、日常で関わる建築仕事であっても同じなのかもしれない。

■現場で感じるギャップ

建築を志すモチベーションのひとつに、自分で設計したものを実物にしたい気持ちがある。大学時代には木匠塾（木興プロジェクト）で、慣れない実施設計と自主施工を行い、図面上の1本の線の重みを知り、意味を考えた。自分の描いた線が上手く収まる様に、設計に手を加え修正しながら、いよいよ実寸大で建ち上げる時には、何にも変え難い高揚感がある。

今回、田の浦という現場へ出て学んだことのひとつに、施主の要望に答えることがある。地区集会所の建設では、施主とその要望が非常に曖昧なまま進めてしまったことを反省している。

今後、後輩達が、田の浦で建築の設計施工という形で木興プロジェクトを続けていくとすれば、もっと明確な施主を探す必要がある。匿名的な集落のみんなではなく、学生にこんなものをつくってもらいたい、こんなことをしてもらいたいと言ってくれる特定の誰かを見つけるべきである。それは、例えば1年目の番屋建設時の施主、漁師さんの様なイメージである。要望は大きくても小さくてもこだわりを持たず、何より極力近い距離感で一緒に考えていける関係を持ちたい。滋賀県という離れた地から通う中で、田の浦で生活している人たちの視点にどうすれば近づけるのかを考えるのがいい。

いざ、田の浦で何かするととなると、年々代替わりを繰り返す学生チームだけでは、理解力や行動力など色々な面で、難しく感じることが多い。しかし、定期的に田の浦へ通うことが出来るのは学生チームの力であり、それ自身が意味を持つことだと思う。

私自身、経験したから分かるようになったことが全てであり、今後も全力で後輩達の学生チームをサポートしたい気持ちがある。

1 "スチューデントファーム「近江楽座」/まち・むら・くらしふれあい工舎"は、大学の総合力、教員の専門性、学生の行動力を源に、地域活性化への貢献をとおして地域社会へ根付いていくプロジェクトを募集し、所定の審査を経て採択されたプロジェクトに対して、調査、研究、活動等経費を助成するもの。平成16年度の文部科学省の「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」に採択され、平成18年度までの3年間の活動実績が大学発地域貢献の先進的な取り組みとして、学内外で高く評価された。そして、平成19年度からは、大学独自の予算を用いてプログラムを継続し、これまでに培ってきたノウハウや地域とのつながりを活かして、さらなる活動を展開している。



写真1



写真2



写真3



写真4